

映画『クラッシュ』に描かれるステレオタイプ、 偏見、人種差別に関する一考察

竹腰 佳誉子¹

A Study of Stereotype, Prejudice, and Discrimination in *Crash*

Kayoko TAKEGOSHI

E-mail: kayoko@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：ステレオタイプ、偏見、人種差別、『クラッシュ』、異文化間コミュニケーション

Keywords : stereotype, prejudice, discrimination, *Crash*, intercultural communication

1. はじめに

映画『クラッシュ』(*Crash*)は、2005年にアメリカで公開され、翌年に日本で公開されたポール・ハギス(Paul Haggis)監督によるアメリカ映画である。映画業界では一般的に高い評価を得ており、例えば第78回アカデミー賞において、7部門にノミネートされ、最優秀作品賞をはじめとして3部門で最優秀賞を受賞している。

映画のストーリーを簡単にまとめるとおおよそ次のようになる。クリスマスを間近に控えたロサンゼルスを舞台に、アフリカ系アメリカ人の男性刑事ウォルター(Walters)が同乗し、パートナーであるヒスパニック系アメリカ人の女性刑事リア(Ria)が運転する自動車に衝突事故を起こし、リアが事故の相手であるアジア系アメリカ人のキム(Kim)と汚い言葉で互いに激しく罵り合う場面から物語は始まる。映画の中において、様々な人種が相互に抱くステレオタイプ、偏見、人種差別のために巻き込まれる事件(出来事)が点と点を結ぶように展開され、登場人物たちのそれぞれの視点からその事件(出来事)が描かれている。主人公と呼べる人物は特に設定されてはおらず、白人(ヨーロッパ系)、アフリカ系、ヒスパニック系、ペルシャ系、アジア系のアメリカ人の登場人物たちが、それぞれ特定の人種に対してステレオタイプ、偏見や差別意識を持っていたり、逆にステレオタイプ、偏見や差別意識を抱かれたり

している。そのために日常社会においては「クラッシュ(衝突)」が避けられない状態であり、彼らは言葉には言い表せない「生きにくさ」とでも言うべきものを日々感じているのである。

これまでの先行研究では、ヴィッラルバ(José A. Villalba)らによって映画『クラッシュ』の多文化教育あるいは様々な文化的背景を持つ人に対するカウンセリング能力向上のための教材としての有用性が示されているが¹、作品で描かれる描写に関する分析はされておらず、とりわけ作品の中で重要な役割を果たす「自動車」の描写や役割についてもほとんど触れられてはいない。ヴィッラルバらの研究目的は、映画を通じて生徒たちにある種の疑似体験をさせ、多文化意識を高めたり、自分自身が持つステレオタイプについて考えさせたり、映画の登場人物たちのような宗教的あるいは人種的ステレオタイプを持つ人々とどのように対峙することができるか等について議論させるための教材としての有用性を明らかにすることであり、本研究目的とは必ずしも一致しない。しかしながら作中の様々な場面で現れる「自動車」に関連する描写を考察することは、登場人物たちがお互いに持つステレオタイプや偏見をよりよく理解できるだけでなく、彼らが自動車を媒体として、どのように自分自身が抱くステレオタイプや偏見を和らげていくのか、あるいは登場人物自身がどのように変化するのかその過程を知ることは、多文化教育やその指導者の教材として本作品を利用する際にも、単にステレオタイプや偏見が分かりやすく描かれた一例としてのみ取り扱うよりも役立つ

¹ 富山大学人間発達科学部

のではないだろうか。

よって本稿においては、映画『クラッシュ』の中で描かれているステレオタイプ、偏見、人種差別とそれらの回避や中和の仕方について異文化間コミュニケーションの枠組みからより詳細にみていくことによって、作品中でステレオタイプ、偏見、人種差別に由来する「クラッシュ（衝突）」がいかにして自動車を媒体にして回避、および中和されていくのかを明らかにする。このことによって、本作品が描くステレオタイプ、偏見、人種差別の問題に対する視点がより明確になるだけでなく、アメリカ社会が抱えるこの問題の根深さがより明確になると思われる。

2. ステレオタイプ、偏見、人種差別

ステレオタイプとは、ある集団やその集団に属する者たちに対しての過度に一般化したイメージのことである。それは一種のカテゴリー化であり、我々が見知らぬ人に出会った時のステレオタイプは、ごく自然な認知プロセスであると言える。我々がステレオタイプを利用するのは、この世界があまりにも大きく、複雑であり、流動的であり、加えて情報量が膨大であるために理解することが非常に難しいからである。そのために我々は入ってくる情報をフィルターにかけてカテゴリー化するのである (Samovar 389)。しかし、あまりにも一般化しすぎることは問題につながる可能性がある。このことについてアドラー (Nancy J. Adler) は、次のようにその問題点を指摘している。

Stereotypes become counterproductive when we place people in the wrong groups, when we incorrectly describe the group norm, when we evaluate the group rather than simply describing it, when we confuse the stereotype with the description of a particular individual, and when we fail to modify the stereotype based on our actual observations and experience. (Adler 79)

このようにある特定の条件を満たすとステレオタイプは問題の原因となりうる。

偏見は情報の欠如のために好ましくない態度や嫌悪感が他の民族集団やその集団に属する個人に直接

向けられることを意味している。そして否定的なステレオタイプや偏見がさらにエスカレートした形を人種差別と呼ぶことができるだろう。人種差別は、ある特定の人種の優越主義に基づくものである (Samovar 396)。

ステレオタイプ、偏見、人種差別は通常段階的に進むものであり、そのため否定的なステレオタイプと偏見、偏見と人種差別の間には明確な線引きはなく、その境界線は曖昧に重なっていると考えられる。当然のことながら、否定的なステレオタイプ、偏見、人種差別は我々の異文化間コミュニケーションに大きな影響を及ぼす結果となりうる。

3. 映画『クラッシュ』に描かれるステレオタイプ、偏見、人種差別

3.1 アフリカ系アメリカ人アンソニーの場合

アフリカ系アメリカ人の青年アンソニー (Anthony) は、白人に対しては言うまでもなく、自分たちアフリカ系アメリカ人に対してもある種の根拠のない非常に強い否定的なステレオタイプ、偏見、人種差別意識を抱いている。友人のアフリカ系アメリカ人ピーター (Peter) とレストランを出た後、次のように不満を口にしている。

アンソニー：スパゲティを1時間 32分待たされた白人がいたか？コーヒーも一杯だけ。ウェイトレスは白人の客には何杯もお代わりを注いでいたぜ。

ピーター：お代わりを頼みもしないで人種差別はないだろ？彼女、黒人だったし。

アンソニー：黒人女は差別しないのか？人を外見で判断しない女を一人でも知っているか？あの女、俺らを見てチップを払わねえと2秒で即決した。奴らの意識は変わらねえよ。(チャプター 2, 下線部は筆者による)

アンソニーの「奴ら」という言葉には、白人のみならず自分と同じ人種であるアフリカ系アメリカ人に対しても向けられており、アンソニーが誰もがアフリカ系アメリカ人に人種差別的な意識を抱いているという偏見に囚われていることは明らかである。

そして話しをしながら歩いていた二人の前に白人の検事リック (Rick) と妻のジーン (Jean) が歩いて近づいてくる。ジーンはアンソニーとピーターの姿を捉えたと思われた瞬間、自分の腕をリックの腕に強く絡め、その光景を見たアンソニーは次のように激しく反応する。

アンソニー：おい、あの女何をしたか見たか？

ピーター：寒いからさ。

アンソニー：俺らを見たからだ。

ピーター：そりゃねえよ。

アンソニー：周りを見てみる。ここは白人ばかりで超安全な場所だ。なのにあの女は、UCLA の学生風の俺らを見てビビった。俺らがギャングに見えっか？おっかねえか？違う。ビビるのは、俺たち黒人の方だぜ。黒人は俺らだけで、周りはカフェイン好きの白人と物騒なロス警察。なのに俺たちは、ビビってない？

ピーター：銃があるから？

アンソニー：そうだ。 (チャプター 2)

そしてこの台詞の後、アンソニーとピーターはジーンらに銃を突きつけて、彼らの SUV 車を強奪する。

ジーンが彼女の夫リックに腕を絡め、自分の身とクラッチバッグを守るような仕草を見せた時、アンソニーが語ったように彼女の視線が本当にアンソニーらに向けられていたかどうかは、視聴者の目にははっきりとはしていなかった。実際、一緒にいたピーターはジーンがリックに腕を絡めたことについて、ただ寒かったからだろうと推測している。ジーンとリックの視線がアンソニーらに向けられたのは、むしろアンソニーらがジーンたちのことについて何やら話していた時だったように視聴者には感じられたのではないだろうか。ジーンの視線がアンソニーらに向けられていようといまいと、それはごく一瞬の出来事であったのは間違いないのである。このことからアンソニーが抱くステレオタイプや偏見は非常に強いものと分かる。

3.2 アフリカ系アメリカ人キャメロンの場合

アンソニーとリックは盗んだ車を売りに行く途中、韓国人をひいてしまい、その結果あてにしていた買

い手から車の買い取りを拒まれる。そしてアンソニーとピーターは、翌日同じような SUV 車を盗もうと試みる。その車は、アフリカ系アメリカ人でテレビ局のディレクターであるキャメロン (Cameron) のものだった。キャメロンはこの日の前夜、彼の妻のクリスティーン (Christine) と車に乗って帰宅途中に、白人警官のジョン (John) とトム (Tom) に呼び止められ、彼らが何も犯していないにもかかわらずジョンから執拗に取り調べを受けたのだった。ジョンによる二人に対する取り調べの仕方は、誰の目から見ても人種差別主義者のやり方そのものであり、それは相棒のトムでさえも辟易するものだった。その証拠にトムはその日の翌日、上司にパートナーの変更を求めている。

ジョンのクリスティーンに対するセクハラまがいの行為に対し、キャメロンは何も言えずただ傍観していた。最終的にキャメロンは反論するどころか、ジョンに対して謝罪の弁を述べたのだった。クリスティーンは帰宅後、このことに対してジョンに不満をぶつけるとともに、この件を伝えようと警察に電話をかけようとする。キャメロンは警察に電話などしても無駄であり、誰も自分たち (黒人) の言い分は聞いてくれないと話し、なんとかクリスティーンをなだめようとする。しかし、クリスティーンは怒りは収まらず、キャメロンに対し「あなたの心配事は、仕事仲間に“あいつは黒人だ”と再認識されることよ」と言い放ち、キャメロンは「捕まれば、君も“黒人の立場”が分かるさ」と言って応戦する。

キャメロンは、クリスティーンが述べているように自分自身がアフリカ系アメリカ人であることに對し、アメリカ社会におけるマイノリティ特有のある種の劣等感のようなものを抱いており、また白人に対しては自分たちが決して超えられない、あるいは超えてはいけない壁のようなものを常に感じていると思われる。そしてキャメロンは富も地位も得て、キャメロン自身が抱いている「アフリカ系アメリカ人らしさ」とでもいべきものを捨て去り、アメリカ社会における主流派である白人文化に溶け込み、自分の本当の姿や「アフリカ系アメリカ人らしさ」というものをひっそりと隠して生きてきたのだ。実際、キャメロンはクリスティーンに学生時代は友人たちとアフリカ系アメリカ人俳優たちによるコメディの『コスビー・ショー』 (*The Cosby Show*) を見ることはしなかったと語っている。ダウニング

(John D. H. Downing) は、『コスビー・ショー』がアフリカ系アメリカ人の比較的裕福な家庭の家族を主人公にしているが、それはアメリカ社会における構造的な不公平と人種差別を覆い隠すためであると指摘しているが、キャメロンも『コスビー・ショー』のなかのキャラクターたちと同じように、たとえ富と地位を現在得ていたとしても彼がアメリカ社会においてマイノリティであるという事実は決して消えないのである。キャメロンにとっては、『コスビー・ショー』を誰かと一緒に見ることは、周りに自分自身がアフリカ系アメリカ人であることを再認識させることにつながるのである。キャメロン自身が抱いている「アフリカ系アメリカ人らしさ」というものは、キャメロンの抱く「アフリカ系アメリカ人に対するステレオタイプ」に置き換えることも可能であろう。このことはキャメロンが社会における地位は全く異なるにも関わらず、結果的にはアンソニーと同じであることを暗示している。

翌日キャメロンは仕事現場で、自分が避けてきた「アフリカ系アメリカ人らしさ／アフリカ系アメリカ人に対するステレオタイプ」の問題を突きつけられる。あるシーンにおけるアフリカ系アメリカ人俳優の台詞に対し、白人のプロデューサーからアフリカ系アメリカ人らしくないから撮り直しをするように指示される。プロデューサーの意見に対し本心では納得できないキャメロンであったが、白人プロデューサーに反旗を翻し、プロデューサーのいう「アフリカ系アメリカ人らしさ」に異議を唱える勇気もなく、ただ黙って彼の指示に従うのだった。キャメロン自身がどんなに白人社会に溶け込んで、自らの「アフリカ系アメリカ人らしさ／アフリカ系アメリカ人に対するステレオタイプ」を隠していたとしても、それは以前と変わらずそこに存在し、キャメロンはむしろそれらをひた隠している自分自身に対して苛立ちを隠せないでいた。

そんな時にアンソニーとピーターから自身の車をカージャックされそうになり、キャメロンは猛然と彼らと戦う。自動車の持ち主がアフリカ系アメリカ人であったことに一瞬驚きを見せたアンソニーとピーターに対し、キャメロンは彼らに「“ニガー”と尝试してみろ」と言ってアンソニーに殴りかかり、ピーターが「撃つぞ」と言ってキャメロンに銃口を向けても決してひるむことはなかった。キャメロンの激しい怒りはそこに居合わせた警察官たちにも向けら

れ、キャメロンは前夜とどうも変わって彼らに汚い言葉を浴びせかけたのだった。キャメロンから発せられた言葉は、まさにキャメロン自身や彼の周りの人々が持つ「アフリカ系アメリカ人に対するステレオタイプあるいは偏見」が土台となっている。その場合は、前夜の事情を知っていた白人警官のトムによってなんとか収められ、キャメロンはアンソニーを車に乗せたままその場を離れる。

3.3 白人ジーンの場合

アンソニーとピーターにカージャックされたリックとジーンが帰宅すると、自宅ではヒスパニック系アメリカ人のダニエル (Daniel) が鍵の付け替えを行っていた。その光景を見たジーンは、リックに次のように言う。

ジーン：朝にもう一度鍵を全て交換して。今度はギャングをよこすなと言って。

リック：ギャング？あの若者が？

ジーン：スキンヘッドに囚人のタトゥーよ。家を出た途端に、合鍵を売るわ。

(チャプター 3)

そして「休みなさい」と言うリックに対して、ジーンは「ただ強盗を待つのか。銃を突きつけられたばかりなのよ」と憤慨して言い返した。さらにジーンはアンソニーらを避けたことについて、ただ避けただけで自分は人種差別主義者になるのかと言って食い下がり、汚い言葉で罵ったのだった。ジーンの大声は当然のことながらダニエルにも届いていたが、彼は仕事を終わると黙って全ての鍵をジーン本人に渡して帰っていった。実際のところ、ダニエルは娘想いの優しい父親であり、仕事にも熱心に取り組んでおりギャングとは程遠い人物だった。

翌朝、ジーンは台所の食器の片付けがちゃんとしていないとヒスパニック系アメリカ人家政婦のマリア (Maria) を注意する。その後友人に電話をかけ、家政婦に対する愚痴をこぼし、自分が毎朝腹を立てていること、その理由が分からないことを告白する。ジーンは毎朝腹を立てていると語っているが、実際は四六時中腹を立てており、そのことは視聴者の目には明らかである。彼女が語るようにこの時点ではその理由は定かではないが、ただ白人以外の人種に対し、彼女が偏見を持った非常に厳しい目を向けて

いることは確かである。アフリカ系アメリカ人のアンソニーやピーター、ヒスパニック系アメリカ人のダニエルやマリアに加え、検事である夫ニックのサポートをしているアフリカ系アメリカ人のカレン（Karen）に対してもリックとの浮気を疑うなど不信感を抱いている。ジーンは白人の友人に電話で愚痴をこぼした後、階段から足を踏み外し転落する。

3.4 白人ジョンの場合

前述したようにジョンは、パートナーのトムとパトロール中にアフリカ系アメリカ人のキャメロンらに対し人種差別的なやり方で不当な尋問を行なった。彼のアフリカ系アメリカ人に対する人種差別は徹底しており、それはこのパトロール直前の保険会社の女性との電話でのやり取りからも明らかである。

ジョンは、尿道炎の痛みで眠れない父親のことを相談するため保険会社に電話をかけ、相談する。その際ジョンは満足のいく回答をもらえなかったことに腹を立て、電話の相手が自分の名前-「シャニクア・ジョンソン (Shaniqua Johnson)」-を名乗った途端に、「アフリカ人のくそ女」と言い放ち、シャニクアはすぐに受話器を置く。ジョンは、女性のファーストネームを聞いて、彼女がアフリカ系アメリカ人であると判断し、ここでも人種差別的な言葉を浴びせたのである。ジョンがアフリカ系アメリカ人に対して人種差別的な意識を抱いている理由は、翌日にシャニクアの元を訪れた際のジョンとシャニクアの会話から推察することが可能である。ジョンは、尿道炎に苦しむ父について次のように語っている。

父親は清掃員として働いたお金で会社をはじめ、23人の従業員を雇っていた。従業員は全員アフリカ系アメリカ人であり、平等に給料を支払ってきた。30年間、彼らと一緒にゴミを運んでいたんだ。少数民族の雇用主を優先する法律ができて、父親は一夜にして全てを失った。会社も家も妻も。だが恨み言は言わない。あんたたちの利益のために全てを失った男にほんの少し手心を加えてくれるだけでいい。そんなに大事か？（チャプター 10）

この言葉に対し、シャニクアは「お父様はご立派な人だ。ご本人が来たら、多分ご要望通りにしたでしょう」と答えている。

ジョンは、アメリカにおいて1960年代に過去の長い社会的・構造的差別を償い、そして是正するために導入された「アファーマティブ・アクション (Affirmative Action)」に対する不満を述べていると考えられる。アファーマティブ・アクションに対する不満はジョンに限ったことではなく、1980年代になると多くの白人たちから「逆差別」であるという声とともに高まり始めた。ジョンが「有能な白人の男たちが職を奪われている」とシャニクアに言ったように、白人層のなかに「能力のある人を差し置いて、能力のない人を採用すること」への懸念や逆差別的な感情が生まれていたことは確かである。またアファーマティブ・アクションによる人種的な配慮が逆に人種を強調する可能性もあるだろうし、その結果マイノリティ自身が劣等感を抱いたりすることもありうる。またジョンの場合に見られるように人種差別に繋がることもよくあることだ。ジョンは、シャニクアをカテゴリー化されたアフリカ系アメリカ人としか見ることができていない。アファーマティブ・アクションの影響によって、ジョンの父親が不当な扱いを受けることになったとしても、それはシャニクアに原因がないことは誰の目にも明らかである。しかし、ジョンの持つ強い偏見や人種差別意識は、結果的にシャニクア個人との交流を阻ませているといえる。

4. 映画『クラッシュ』に描かれるステレオタイプ、偏見、人種差別の回避、あるいは中和

これまで映画の中で描かれるステレオタイプ、偏見、人種差別についていくつか例をあげながら見てきたが、これらのステレオタイプ、偏見、人種差別が作品の中でどのように回避、あるいは中和されていくのかについて見ていく。

4.1 アフリカ系アメリカ人アンソニーとキャメロンの場合

アンソニーがキャメロンの車をカージャックしようとした際の出来事は既述した通りであるが、キャメロンはこの時自分の気持ちをアンソニーと白人警官たちにぶちまけている。前夜ジョンに不当な取り調べを受けていた際は、キャメロンは黙って彼の指示に従い、何を言われても、妻のクリスティーンが何をされてもただじっと自分の気持ちを押し殺し、

時が過ぎるのを待っていた。キャメロンは黙って、いつものように「アフリカ系アメリカ人らしさ」というものをできるだけ見えないように隠していたのだ。それはアンソニーと白人警官たちに対して汚い言葉で罵っている時のキャメロンとは対照的な姿だったと言えるだろう。その場は、白人警官トムによって収められ、キャメロンは車にカージャック犯のアンソニーを乗せたままその場を離れる。アンソニーを車から降ろす時に、キャメロンは「お前は俺だけでなく、お前自身も貶めている」という言葉をかけたのだった。このキャメロンの言葉は、アンソニーだけではなくキャメロン自身にも向けられたものだと考えられる。それは、前夜に人種差別主義者の白人警官ジョンに不当な取り調べを受けながら何も言えなかった自分に対してであり、翌日の職場でプロデューサーに「アフリカ系アメリカ人らしくない」と言われて、やはり何も言い返すことができなかった自分に対してである。

キャメロンは、彼自身が最も恐れていたことである「アフリカ系アメリカ人(らしさ)」を否が応でも再認識させられている。これまではこれらをひた隠しにしてきたわけであるが、それは結局自分自身のアイデンティティを傷つけることにも繋がっており、彼は今アンソニーや白人警官と立ち向かい、自分の気持ちを吐き出すことで自尊心をなんとか取り戻そうとしている。キャメロンはこれまでのように「アフリカ系アメリカ人らしさ」や「アフリカ系アメリカ人に対するステレオタイプ」に対してそれらがまるで存在しないかのように無視するのではなく、再認識することでそれらをうまく対処しようと試みているのである。

一方、アンソニーはキャメロンの「お前は俺だけでなく、お前自身も貶めている」という言葉によって、自分自身の行いや人種について改めて考える機会を与えられている。アンソニーは公共バスに乗らない理由として「公共のバスには自分たち(黒人たち)を晒し者にするために大きな窓がついていて、自分たちをバスに乗らせないようにしている」とピーターに以前話していたが、キャメロンの車を降りた後は公共バスに乗っている。アンソニーはもちろん移動手段がないために不承不承に公共バスに乗車したのだろうが、バスの乗客たちをぐるりと眺め、アメリカ社会で暮らすアフリカ系アメリカ人や白人以外の人種の多様性を改めて知ることになる。

アンソニーの乗るバスが彼が韓国人を轢いた場所の近くを通った時、彼はそこにバンが残されていることに気づき慌ててバスを降り、バンを売りに行くことにする。バンを売りに行くとバンには密入国者だと思われるタイ人やカンボジア人が10名以上おり、買い手は一人当たり500ドルで購入すると提案する。しかしアンソニーは彼らを売ることなく、彼らをバンに乗せてチャイナタウンまでやってきて、「ここはアメリカだ。時は金なりだ」という言葉とともにそこで全員を解放するのだった。盗みを繰り返していたアンソニーがキャメロンとの出会いで改心したと断言することは到底できないが、お金儲けの機会を自ら手放し、アジア人たちに自由の機会を与えたことはやはり見逃すことはできないだろう。

アンソニーは以前ピーターにアフリカ系アメリカ人から盗みをする輩に対して批判の言葉を浴びせていることから、彼らがアフリカ系アメリカ人のキャメロンの自動車を盗もうとした際に一瞬驚きのようなものを見せたのは偶然ではなかったと思われる。アンソニーにとっては、それは想定外のことであり本意ではなかったのではないだろうか。だからこそ、キャメロンの最後の言葉がアンソニーの心に響くものであり、そのため自分たちと同じマイノリティであるアジア人を売って、お金を得ることをやめるといった考えに至ったのではないだろうか。彼ら売ることは、自分を貶めることにつながるからである。

キャメロンの自動車を強奪しかけたことにより、アンソニーはキャメロンと偶然出会い、二人はお互いにアフリカ系アメリカ人が持つ偏見を抱えながら、自らの抱える偏見と率直に向かい合うことに成功したといえる。またアンソニーは、残されていたバンを偶然手に入れ、そこに乗っていた密入国者と思われるアジア人を「車から出す」ことによって、彼らを文字通り解放しただけではなく、彼らに今後ほかの人たちとの接触の機会を与えたと言える。

4.2 白人ジーンの場合

階段から足を滑らせて落ちたジーンは、ベッドで白人の10年来の友人たちに以前と同じように愚痴を聞いてもらうために電話をかけているが、皆自分のことを優先しジーンの話に付き合ってくれることはなかった。一人ベッドで休んでいるジーンのもとに、家政婦のマリアがお茶を持ってきて、ジーンを抱きかかえるようにして彼女の身体を起こす。その

時ジーンはマリアの身体をしっかりと抱きしめながら、「変な話をしている？あなたは親友よ」と言い、涙を浮かべるのだった。ジーンの穏やかな表情から彼女の抱える不満や不信感がすっかり消え去っていくのを視聴者は感じたはずである。

ジーンが抱えていたヒスパニック系アメリカ人であるダニエルやマリアに対する不信感、外見などに由来する根拠のないステレオタイプや偏見であるが、ジーン本人はそのことには気づいてはいなかったのだ。グディカンスト (William B. Gudykunst) は、ステレオタイプは他の集団に所属する人々の行動に関して、ある期待を抱かせると述べている。我々は、無意識に自分たちの期待が正しいと思ひ込み、それを肯定しようとするのである。しかもこのような行為は、特に「偏見とは無縁」というアイデンティティを出したいような条件下で起こる (Gudykunst 126)。この条件は、「アフリカ系アメリカ人を見ただけで自分は人種差別主義者なのか」と言い放ったジーンにも当てはまるだろう。ジーンは、前述したようにマリア個人との直接的な接触を介して、いとも簡単にこの偏見を捨て去ることができたことがわかる。個人的特徴に基づいて我々がコミュニケーションをする時、脱カテゴリー化、脱ステレオタイプ化が起こるのである。

4.3 白人ジョンの場合

ジョンは、保険会社のシャニクアとの面談の後に自動車事故に遭遇する。一台の車は横転しガソリンが漏れており、もう一台の車からは火の手が上がりそうな状況だった。ジョンが横転している車のもとに駆けつけると、そこには昨夜自分がセクハラまがいの取り調べをしたクリスティーンが閉じ込められていた。クリスティーンは、ジョンが昨晚の警官であることがわかると「触らないで」と言って激しく抵抗する。しかし、ジョンは彼女に非常に優しく、丁寧な態度と言葉遣いで接することに徹底する。ジョンは「膝に手を回しますよ」と声をかけてからクリスティーンの身体に触れ、クリスティーンが不快な思いをしないよう最大限の配慮をすると、クリスティーンの状態も徐々に軟化し、ジョンに対し信頼を置くようになる。火の手が上がり、ジョンとクリスティーンの前にも及ぶとジョンの同僚がジョンを無理やり引きずって車から出すが、ジョンは再び車に戻りクリスティーンを助け出すことに成功する。

前夜ジョンとクリスティーンは同じように二人のそばに車がある状態で出会っているが、その時はジョンが行なったアフリカ系アメリカ人であるクリスティーンらに対する態度は、クリスティーン個人ではなく、アフリカ系アメリカ人というカテゴリー化されたものに対する態度であったことは明白である。しかしながら自動車事故の場面においては、ジョンはクリスティーンを個人として扱っており、マリアの場合と同じように脱カテゴリー化に成功していると言える。皮肉にも「クラッシュ＝(自動車)衝突」は、修復不可能と思われたジョンとクリスティーンの関係性を劇的に立て直したのだった。

5. 自動車の役割

ホフステード (Geert H. Hofstede) は、異なる文化的背景を持つ集団のメンバーがお互いに信頼関係を打ち立てるためには、これらの集団の人々が平等な立場で出会い、交流できる環境が必要であると述べている (Hofstede 388)。映画の中では、我々が想像する理想的な「平等な立場で出会い、交流できる環境」は登場人物たちには残念ながら与えられてはいない。しかしステレオタイプや偏見によらず相手と向き合える環境が、まさにアンソニーとキャメロンが出会ったカージャックの場面であり、ジョンとクリスティーンが出会った自動車の衝突現場の場面だったと言える。どちらも車を媒体として生きるか死ぬかという究極的な場面が作り上げられており、それはある意味お互いに平等な立場であったと言えるだろう。だからこそこれらの場面において彼らは自分自身が持つステレオタイプや偏見を捨て、カテゴリー化というフィルターを一切通さずに、お互いに「個」として率直に交流できたと考えられる。つまり、本作品において自動車は登場人物たちに「平等な立場で出会い、交流できる環境」を与える役割を果たしているといえる。

映画の冒頭でアフリカ系アメリカ人の男性刑事ウォルターは、作品の舞台となっているロサンゼルスで暮らす人々が「触れ合い」を求めていると語っている。ロサンゼルスでは、人々はたいてい車の中にいるために触れ合うことができないでいるが、実際はぶつかり合って「何かを実感したいのだ」と彼は述べている。ウォルターの指摘通り、映画の中でも人々はたいてい車に乗っていて事件に遭遇している。

白人ジーンは抵抗する術もなくアフリカ系アメリカ人アンソニーらに SUV 車を強奪され、アフリカ系アメリカ人のキャメロンと妻のクリスティーンは、ドライブ中に白人警官ジョンから不当な取り調べを受けている。言うまでもなく、これらの事件は事件関係者双方に、つまり相手のみならず自らの人種に関するステレオタイプや偏見について思いをめぐらせ、そのステレオタイプや偏見をより一層強くすることにつながっている。しかし同時に映画の中では人々は車を媒体として、時には「クラッシュ（自動車の衝突）」が原因で、文字通りぶつかり合うことで、言い換えるならばステレオタイプや偏見を捨て、カテゴリー化することをやめ、そこに存在している「自分」だけではなく、自分を取り巻く人々について「個」として改めて実感することにつながっていると考えられる。してみれば、車はウォルターが語ったように人々との率直な交流を阻むだけではなく、ウォルターが望んでいた率直な交流を促進する側面も併せ持つことが分かる。しかしながら映画の冒頭とほぼ同じように、自動車同士が衝突し、様々な人種の運転手らが互いに罵り合う場面でエンディングを迎えていることを考慮すると、先述したように確かに自動車は「平等な立場で出会い、交流できる環境」を生むひとつのきっかけを与える役割を果たしているものの、そのきっかけによって「何かを実感」し、率直な交流ができるか否かは、あくまでも個人に委ねられていることを暗示しているように思われるのである。

6. まとめ

映画『クラッシュ』においては、アメリカ社会における様々な人種による様々な人種に対する否定的なステレオタイプ、偏見、人種差別が描かれている。異文化集団に対するステレオタイプや偏見は、実際の出来事をも歪めてしまう可能性がある。それは、アフリカ系アメリカ人アンソニーの白人ジーンに対する見方、あるいは接し方、白人ジーンのスパンニッシュ系アメリカ人のダニエルやマリアに対する見方、あるいは接し方に表れていた通りである。ジーンは、アンソニーたちにアフリカ系アメリカ人であるという理由だけで警戒心を抱いて夫であるニックに腕を絡めたわけではないし、ダニエルはジーン宅の鍵の付け替え作業に従事していただけであり、彼の仕事

ぶりや性格と彼がスキンヘッドでタトゥーがあることは本来全く関係がないのである。

現代社会においても同じように多くの人々は他者をカテゴリー化して、ステレオタイプや偏見といったフィルターを通して他者との接触を図ろうとしている。だからこそヴィッタルバらは、多文化教育や様々な文化的背景を持つ人を相手とするカウンセラーの養成のために本映画をある種の疑似体験のためのツールとして活用することの有用性を指摘しているのだ。しかしながら、映画には様々な文化的背景を持つ人々がクラッシュ（衝突）するだけではなく、自動車を媒体として「平等な立場で出会い、交流できる環境」が与えられることによって、登場人物たちが抱えるステレオタイプや偏見といった思いが中和されたり、解消されたりしていく過程も描かれている。したがって「平等な立場で出会い、交流できる環境」が異文化コミュニケーションを円滑に図るうえでいかに重要であるのかを知っておくことや、そのような環境が映画で描かれているように我々の想像をはるかに超える場面によってももたらさせる可能性があることを認識しておくことは、多文化・異文化に関わる教育においても大いに役立つと考えられる。

本映画は、自動車を媒体として「平等な立場で出会い、交流できる環境」を生むきっかけを与えることによって我々にアメリカ社会における人種差別に関する問題の回避や中和について希望を与えてはいるが、いまだその問題の根がいかに深いかということも改めて訴えかけていると言えよう。

注

- 1 José A. Villalba, "Crash: Using a Popular Film as an Experiential Learning Activity in a Multicultural Counseling Course." *Counselor Education and Supervision* Vol. 47, Issue 4. (23 December, 2011)

引用文献

- Adler, Nancy J. *Intercultural Dimensions of Organizational Behavior, 5th ed.* Thomson/South Western, 2008.
- Downing, John D.H. "The Cosby Show and American Racial Discourse," *Discourse and*

- Discrimination*. Wayne State University Press, 1988.
- Gudykunst, William B. *Bridging Differences: Effective Intergroup Communication, 3rd ed.* SAGE Publications, 1998.
- Hofstede, Geert H. *Cultures and organizations: software of the mind: intercultural cooperation and its importance for survival, 3rd ed.* McGraw-Hill books, 2010.
- Samovar, Larry A., Porter, Richard E., McDaniel, Edwin R. and Roy, Carolyn S. *Communication between Cultures, 9th ed.* Cengage Learning, 2017.
- クラッシュ [DVD] 東宝, 2006.

(2019年10月18日受付)

(2019年12月18日受理)